

再考「地域の将来を担う子どもたちを地域全体で守り育てる」

東北学院大学教授 水谷 修

地域の将来を担う子どもたちを地域全体で守り育てる。この言葉は、多くの地域の学校支援や青少年育成の活動で当たり前のように使われ、スローガンにさえなっている。そのため、これを取り上げて何かを言うことに躊躇してしまう雰囲気がある。しかし、これが過度に強調され、様々な場面で使われることによって見落されてしまうこと、子どもたちの成長・発達を阻んでしまうことはないのだろうか。この点について少し考えてみたい。

子どもは大人と比べ未熟であることから、安心・安全な生活を送り成長・発達するには大人の庇護が必要である。しかし、その一方で、子どもは大人とは異なる感性や能力をもち、大人とともにいまの社会を生きる存在でもある。「将来を担う」という部分が過度に意識されると、子どもにとってのいまは、将来に向かっての準備期でなくなり、大人は、子どもを守り、将来の地域を担えるように子どもを教え導こうとする。

一方、「いまの社会を生きる」という点に着目して子どもを捉えた場合、子どもは、大人とともにいまを生きいまの地域社会をつくる、大人のパートナーとしての位置づけが可能になる。しかも、大人とは異なる感性や能力に触れることで新たな気づきや学びが生まれ、子どもの意見や考えを尊重し協働して地域をつくろうとする姿勢が大人に生まれてくる。このことを強く意識させたのは東日本大震災である。子どもは子どもなりに、避難所で自分たちが何をすべきか、何ができるかを考え行動した。大人と一緒に復旧に向けて地域に何が必要かを考え発信した。

このようなことは、何も震災という特別な状況下においてのみ必要なわけではない。地域には絶えず課題が存在し、それを地域住民が連携して解決することが求められている。この「住民」として忘れられている存在が子どもである。子どもは、大人に守られ育てられるだけの存在ではない。地

域の環境を自分たちが生きやすいように変える権利とともに、課題の解決に向けて大人と一緒に行動する責任がある。

気になる調査データがある。2013年に行われた内閣府の国際比較調査では、「私の参加により変えてほしい社会現象が少し変えられるかもしれない」と考える日本の青少年（13歳～29歳）の割合が約3割で、7か国中もっとも低いことが報告されている。このような結果になったのはなぜなのだろうか。いろいろな解釈が成り立つだろうが、小さなときから社会への参加体験が少なく、自分を取り巻く環境を所与のものとして受け止めてきたことが影響していないだろうか。

このように考えると、子どもを守り育てる存在であるとともに、地域社会の一員として大人とともに地域をつくる存在として捉える子ども観が必要であり、この子ども観にたって子どもと向き合い協働できる地域をつくる必要がある。

仙台市では、各区中央市民センターで、子どもの社会参画を推進する学習事業を展開してきた。2018年度からは、事業の主体を地区の市民センターに移し、地区レベルでの活動を展開し始めている。このような活動が地域に根付くには、地域のさまざまな施設や機関、団体の連携協働が必要である。また、それに係わる大人の役割は、「子どもは地域社会の一員」という子ども観をもち、子どもが「自分たちも地域の役に立てる」と思えるようなメッセージを送り続け、ともに活動することではないだろうか。

